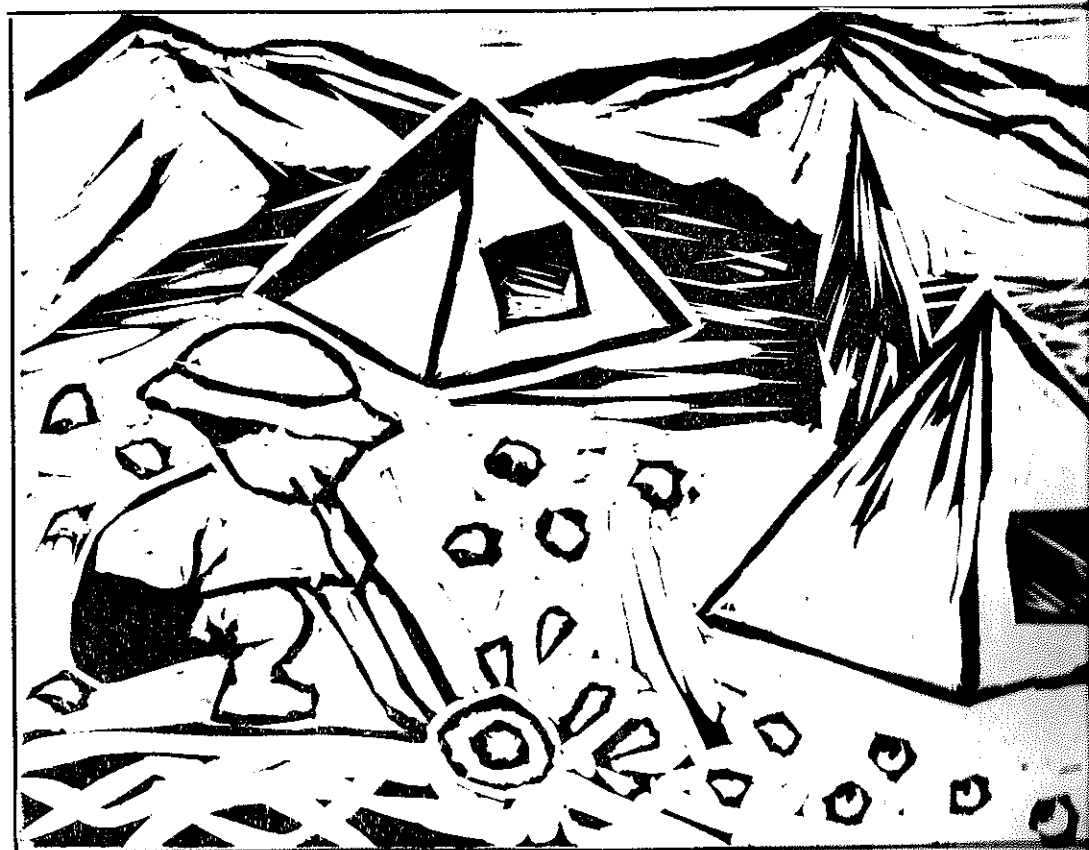


いなほ

第 17 号



1970, 3

梶山小学校

「いなほ」十七号発刊にあたって

学校長 浦田正男

目次

「いなほ」十七号：学校長 浦田正男
発刊にあたって

作文

一年生	一〇四
二年生	五〇八
三年生	九〇二
四年生	一三〇一六
五年生	一七〇二〇
六年生	二一〇四〇

表紙版画 六年 長島明美

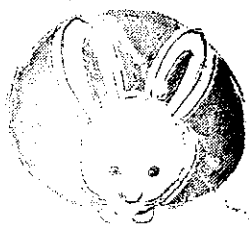
「いなほ」も、年をかさねて十七号になりました。
いま、私の机の上に、一号から十六号まで一冊に綴じたのがおいてありますが、これを、幾日もかかって読んでみた結果、たいへんためになり、又たのしく感じました。文や詩からにじみでてくる素朴な感情や、するどい観察にいつのまにかひきつけられて、作者と話し合っているような気持ちになったからです。

私たちは、眠っているとき以外、いつも、なにかを感じたり、考えたりしているわけですが、その感じたことや、考えたことを文字で表現することになるとひじょうに困難を感じます。あたまのなかでいま一度その考えを「たしかめ」そして「ほりさげ」「せいり」しなければ文章にならないからです。ですから、日常、ただ、思ったり、考えたりしただけでは、すこし、時間がたつと、すぐ忘れてしまいますが、自分で書いた作文や詩は後々まで忘れずに残ります。

「いなほ」も、はじめは「作文の力を高める」ということが目的で発刊されたようですが、しだいに「思い出の記念文集」というふうにかわってききました。つまり、毎年三月、六年生の文を中心に、いままでをふりかえり反省するという気分で編集されるわけです。十七号を読む場合も、それを念頭において深く味わうべきだと思います。

第一号当時の児童たちは、現在では相当の年配になり、それらの生活をしておられるはずですが、いまそれらの方々が第一号の頁をめくられたら、さぞ童心をなつかしむ心で一パイになられることでしょう。

十七号を手にしたみなさん、この文集を、幾年後、幾十年後、また取り出して小学校時代を懐しく思い出すことができるよう大切に保存しておいて下さい。



かくしゅう

はっぴようかい

一年 青木 よしほ

二月二十日に、かくしゅうはっぴようかいがありました。

一年生は、げきです。「いなほの白うさぎ」というげきをしました。

わたしは白うさぎになりました。わたしは出るとき、いやになりまじした。どうしてかというとおきやくさんが、いっげいきでいたからです。でも、がまんをして出ました。

「えんえん、いたいよ、いたいよ。」

と、なきながら、あるいてぶたいへ出ました。うさぎさんたちが、みんな、

「どうしたの。」

と、いわれたら、わたしが

「えんえん、いたいいたい、どうぞわけをあききください。みんなわたしがわるかった。」

と、いいました。大くにぬしのみことが

「それはかわいそうだ。いいことを、おしえてあげよう。」

と、いいました。そして、うさぎさんたちに、「川の水で、白うさぎのからだをあらって、そこに

はえている、がまのほをとって、白うさぎをねかせてやるがよい。」

と、いいました。うさぎさんたちは、がまのほをとってきから、まろくなつて「はやくよくなれ」とうたっているあいだに、わたしは白うさぎをさるの、でたいへんでした。ひどくてわかりませんでした。

「あ、なかつた、うれしいうれしい。」

と、いうところ、わたしはうれしくなつて、おどりのとき、げん気よくおどりました。

ますみちゃん、

「わにやめのせなかを、ぴんぴんぴんぴん。」

と、いつてとんだら、ぶたいの上、うさぎさん、

「かきをかき、ぴんぴんぴんぴん。」

と、いつてとんだら、またぶたいの上、うさぎさん、

「たしはあかしくなりました。でもなきまねをして、いたから、わらいませんでした。」

さいごにわたしは、すこしまちがえたので、どきんとしました。けれども、いいがに、いいなあしを、しました。一ばんさいごに、おどりを、おれいを、したら、あかさんたちが手をたいてくれました。わたしは下をむいて、いたけど、とてうれしかった。

それからわたしは、

「大くにぬしのみことさ。」

と、いつたら、うさぎさんたちみんな、また、

「大くにぬしのみことさ。」

「いいました。また、わたしはすこしはしって、手をかりました。そのとき、大くにぬしのみこと、かすみちゃん、ふくろをかついで手をふりながら、はなみちをあるいてかえりました。まぐがしまろうかとしたら、手がだるくなったけど、がまんして、手をあげていました。やっ、まぐがしまりました。みんな、ぱちぱちと、手をたたいてくれたので、すううという気もちになりました。うあへかえったら、あはあちゃんが、「一年生は、一ばんじょうずでしたよ」と、ほめてくださいました。」

がくしゅうはっぴよう 一年 島 まさこ

がっこうで、おかあさんたちが見にくる、がくしゅうはっぴようかいがありました。日は二月二十日でした。わたしはなんで、がくしゅうはっぴようかいがあるのかもわかりませんでした。一ばんめにするのは、三、四年のがっそうでした。わたしたちのは三ばんめで、「いなばの白うさぎ」という、げきです。わたしはあやうと、まぐのあいだからのぞいて見ると、大ぜいの人たちが見にきていました。わたしはおもわず、

「わあ、たくさんの方がいるなあ」と、小さいこえでいうてしまいました。わたしは、いけない、じょうずにしよう、と、おもいました。わたしは、はじめはすかしかったのですが、だいにわたしたち、いっぺんにゆうきができました。「それより、むこうであそびましょう」と、いうところが、まちがったのですが、おかあさんたちがわらわなかったので、気がすううとして、あんしんしました。でんきが、赤とか青になって、ついたりきえたりして、きれいにひかっています。いなばの白うさぎで、一ばんあもしろかったのは、とあるくんの白うさぎが、「あつ、わにぞめくんがいるぞ、そうだ、いいことかんがえた」と、いうところ、かわをむかれるところが、あかしの、おかあさんたちも「わっはっはっは」と、わらいました。わたしも、わらおうとしたのですが、ぶたいだから、がまんしました。よし、あちゃんの白うさぎに、白いふくをさせるのに、ますみちゃんと、小さいこえで、「もう一かいしか、うたをうたわんから、はやくしようね」と、いいながら、ふくをさせる手つだいをしました。そうして、やっこのことで、ふくをさせることができたので、大きなこえで

「わあ、なあった、なあった」と、いいました。ぶたいの上から、わたしとこのおかあさんを見ようとする、わたしのばんがきたので、見られませんでした。さいごのほうのおどりを、すこしまちがえました。手をかっている、手がだんだん、だるくなってきて、ので、あちそうとしたけど、がまんをしました。みんな、あまりまちがえなかったの、よかったです。うあへかえると、あはあちゃんと、おかあさんが「一年生が、一ばんかわいく、一ばんよかったよ、じょうずだったね」と、いつてくれたので「ほんとう」と、きくと、あはあちゃんは「ほんとうや、まこちゃんも、大きいこえで、じょうずやったよ」と、いわれたので、わたしはほんとうにうれしかったです。



ねこ 一年 扇原 まさこ

よるのとき、あはあちゃんが、わたしのふとんをひいてくれたので、ふとんにはいつてねていて、「ガタン」

と、だれかが、みんじやのとをあげる音がしました。わたしは、ねこがあげたのかなあ、と、おもっています。と、やっぱりねこがへやに、はいつてきました。「しゅ」と、おこると、ねこはなきそうなかあで「にやあん」と、いつて、わたしのかあを見たので、かわいそうになって、ふとんをもちあげて、「ねこ、おいで、おいで」と、いつたら、うれしそうにふとんの中へ、はいつてきました。すこしたつと、「ぐう、ぐう」と、いい気もちで、うに、目をつぶってねてしまいました。しばらくして、あつくつたのか、かあをふとんから出して、またねむってしまった。でもわたしは、へんだなあ、と、おもいました。だってさつきは、「ぐう、ぐう」と、いつていたのに、こんどはなんにもきこえませんでした。どうしてかなあ、と、ふしぎにおもいます。いつのまにか、わたしもねむってしまいました。あさ、目をあけて見ると、もうねこはふとんの中にいませんでした。あんなにかあを出して、いい気もちでねていたのに、どこへいったのかなあ、と、かながえてみると、どこへ、あはあちゃんがきたので、「ねえ、ねこ、どこへいったの」と、きくと「さあ、しらんじや」と

と いわれたので、かわいそうになりました。
すると、そこへねこがきて、ほそい目でわたしを見ながら

「にゃあおんじ」

と、ないて、右の手をながいしたで、ぺちぺちとなめてから、かわをあらっていました。

うちのねこは、ほんとうにいいねこです。でも、あかあさんたちは、おこります。あかあさんが、

「しよいって、あこらっしやい」

と、いうから、わたしは、おこりたくないんだけど、しかたなしに、しかるけど、ほんとうは、ねこがかわいくて、大すきなのです。



くも 一年 君島 さとる

くもさん、いまはもうはるなのに、
どうしてゆきをふらすの。

ぼく、いやだなあと、おもいます。

くもりより、はれのほうがいいとおもうよ。

くもは、どうしてつかぶの。

くもさん、あんたかいとこで、あつかなくない。

ひろい、ふかい、うみの上で、あちそうになりませんですか。

くもは、どうして、できるの。

こわくなかったら、ぼくもくもに、のってみたい。

えんぞく

二年 たまた はるよ

あしたは、えんぞくです。

一、二年は、すいぞくかんへいくことになっていました。

わたしは、はやくねて、ぐっすりねまりました。

あさ、おきてみると、雨がふっていました。

六時に、ゆうせんほうそうで、「あるかかないか」しらせてくれることになっていました。

ゆうせんほうそうで、「えんぞくがある」といいました。

わたしは、おすしをつくらせてもらい、おとうさん

に、学校までおくらせてもらいました。

バスにつくと、こまちゃん先生が、あいさつをい

ました。すいぞくかんへいきしました。

いきました。それをグルーアでみたあと、すこしやす

みました。チョコレートや、あられをたべました。

すこしあそんでいると、よその学校の人たちがきた

ので、またバスにつく。きんたろうおんせんへい

きました。

きんたろうおんせんにつくと、きんたろうおんせ

んの人が、ふくろをかしてくだいしました。そこへ

くつを入れて、大ひろまへいきしました。

大ひろまへいってから、いえからもってきた、お



一年 坂東 ゆきみ

かずみちゃんには、か

わいい、いぬがいます。

なまえは、じゃっく、と、いいます。

わたしが、かずみちゃんへいくと、じゃっくは

「わたくしのかねをなめるので、

「いよだよ、いよだよ」

と、いったら、あ手をします。だから、とてもかわ

いのです。なぜなせをしてあげます。

わたしと、かずみちゃんが、さんぽにつれてい

たとき、わたしがおせんべいをたべたとき、おせ

んべいを見て、たべたいかおをしてみました。わた

しは、やりたいけどあげられません。もし、あげる

と、じゃっくが、むしばになるから、あげません。

じゃっくは、

「わん、わん」

と、ほれたから、わたしは、びっくりしました。

あとから、しずかになりました。

ねずみ

一年 松田 ひでき

ねずみくん、どうしてなんでもかじるの。

きものは、おいしいの。

このまえ、ねえちゃんのきもん、かじったろう。

うまくないもん、たべないほうがいいよ、わかる。

ねずみくん、いいことになるんだよ、わかったかい。

べんとうや、おかしや、バナナをたべました。

よこに、わが子ちゃんがいきました。

「これ、あげるわい」

と、いって、バナナをだしました。わが子ちゃん

のバナナは、くろいバナナでした。わたしは、

「たべたくないのよ」

と、いって、ことわりました。

それから、すこしたって、先生が、こづかいを

くださいました。

「たべものを、かってはいけません」

と、先生がいきました。

みんなは、おうまや、あそぶところのあるほう

へ、いきました。

わたしもいってみると、とちゅうで、おばけが

がみがありました。

わたしは、まり子ちゃんとそばへいって、みまし

た。

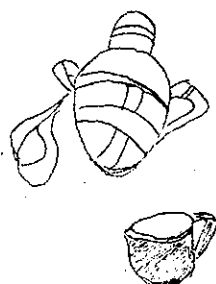
ふとついているわたしが、すごくふとつてみえま

した。まり子ちゃんも、わたしも、おもしろいの

や、こころあそびました。それから、おうまや

いろいろなもののあるところへいって、あそ

びました。



ぼくたちは、こまる山こうえんへ いきます。いくとき歩いていったので、たいへんくたびれました。おかわのはしでやすみました。そこでいろいろなものも たべました。

どんどん歩いていくと、おみやが みえました。おみやのうしろが、こまる山こうえんでした。むしが、たくさんいたので、ぼくと、さとしくんと、のりひこくんと、三人で、むしとりをしました。だいたい三十ぴきぐらい、つかまえました。一年のけん一くんのせなかに、赤とんぼがいきました。それをぼくがつかまえました。

ごはんのじかんになったので、お母さんにつくってもらったおすしを、はらっぱい食べました。

先生が、

「グラランドを一しゅうしてらっしゃい」と、いったので、グラランドを走っていたら、草のところに、七ほしとうがいしました。それをつかまえて、先生のところへもっていききました。

かえりに、トンネルをとおってきました。トンネルに、大かまきりがいました。それをつかまえました。ぼくは、ナイロンのふくろに、三十五ひきぐらいむしを、つかまえました。

かえりは、バスにのって、かえりました。

ぼくは、とまりびょうういで生まれました。おとうさんは、ぼくが生まれないさきから、かみいっぱい、男の子なら、女の子なら、考えておられたそうです。おとうさんは、よろこんで、紙いっぱい書いた中から、「ひろふみ」「まさひで」といふろありましたが、おにいちゃんか、まさのり」というので、おかあさんと、そうだし、おにいちゃんか、のり」とをとって、「のりひこ」という名まえをつけられたそうです。

ぼくの名まえは、おとうさんがつけました。やきゅうのせんしゅで、「のむら かつや」という人が、南海にいて、かつやくしているそうです。その人は、たいへんどりよくして、つよい人になったそうです。おとうさんは、ぼくにも、がんばりつよい、どりよくする人になってもらいたくて、「かつや」という名まえをつけたのです。だから、ぼくも、どりよくしたいと、思います。

クリスマス会

きょう、わたしは、おねえさんとふたりで、こうみんかんへいきました。上村のこうみんかんへいってみると、ゆうこちゃんのおねえさんがいました。一時二十分になりました。ゆうこちゃんもきました。けいこちゃんもきました。ゆうこちゃんもきました。けいこちゃんもきました。

「トランプをしようよ。」

という。

「うん、しようよ。」

と、いいました。ばばぬきをしました。わたしに、ばばがありました。ばばをまん中にしとくと、けいこちゃんもついでにきました。わたしは、

「けいこちゃん、ばばとついでにいた。」

と、いいました。六年生のよしみさんが、

「せきについてください。」

と、いうと、みんなせきにつきました。ケーキがありました。わたしは、ケーキがきらいです。でも食べました。ケーキをたべてから、ガムもいただきました。ガムをたべていて、しらんとのみこんでしまいました。

ゆうこちゃんたちがすべっていたので、わたしは、

「よし、よし。」

と、いうと、ゆうこちゃんが、よしとれました。すべるとしりもちをつきました。わたしは、

「となりのおばさん、しょう。」

と、いいました。そうしたら、だれでもよってきました。でもおとこの人がじやまをしにきたので、おもしろくありませんでした。

てがみ

きょう、わたしは先生にてがみを出すとき、おねえさんと、おかあさんと、いっしょにかきました。おねえさんは、もりた先生にだして、わたしは、おやま先生にだしました。

わたしは、じがへんになったので、もうひとつのはがきに、きれいなじで、かきました。おねえさんが、

「まりこ、きれいなじに、なつたね。」

と、いいました。

わたしは、

「うん。」

と、いいました。

わたしは、

「おねえさんも、きれいなじだね。」と、いいました。おねえさんが、

「あたりまえじゃないか。」

と、いいました。

わたしは、

「はやくかいて、先生にだそう。」

と、いいました。おかあさんがかいてから、いっし

と、きくと、すましたからで
「なあん、ぜんぜんわかんないよ。」
といったので、わたしは、ほっとしました。
いままでのさびしいような、かなしいようなきもちが、いつぺんに明かるい心になり、かえりの足もたいへんかるく家にかえりました。



ナコ（ねこの名）

三年 吉田 京子

「ナコ」とは、わたしのうちのねこの名まえです。
ナコは、さむがりやで、くいしんぼうです。たべるものは、パン、じゃがいも、にくなどが、いちばん好きです。

わたしがひもをさげて、あるいていると、ひものほしき、前足でおさえたり、かんなりして、じいれながらついてきます。

わたしは、「ナコ」とよぶと、テーブルの下について「ニャーオン」となっています。

また、「ナコ」の首をつかんで、ストーブのそばにおくと、のどをゴロゴロさせながら、ねむってしまいます。そんな時、「ナコ」と声をかけると、目

を、半ばらにして、うらめしそうにわたしを見ますが、またねむってしまいます。
そこで、少しいたずらをしてやろうと思つて、「ナコ」のしっぽを、ひっぱると、おこつてしまつて、わたしの手をかみつきました。あまりいたかつたので、顔をたたくとかみつくのをやめてしまいました。あまりいたかつたので、また二回ほどたたいてやりました。



ボチ

三年 前田 憲二

「ボチ」とは、ぼくのうちのねこの名まえです。いつも、ぼくが学校からかえると、なにかくれるのかを、思っているように、ぼくのあとをこまたで「トントントントン……」とついてくる。

台所へ行つて、ねぼしきやると、うれしそうに「かさがサ」と音をたてて食べる。

そんな時の「ボチ」が一ばんかわいく見える。このうれしそうな顔を見ていると、ぼくまでうれしくなりそう。

ときには、ぼくが勉強をしている時など、ひざの上へのぼつてすわり、勉強のじやまをしていく。そんな時、いやなもので、ひざやつくえの上からおろしてやりまします。その時の「ボチ」の顔は、とてもかわいそうに見えます。

この前、学校でぼくたちの組で、ねこの名まえのいいあいっこをしました。よこにすわっている子が「玉」といった。

ぼくは「ボチ」といった。

すると、よこにすわっている子が「わっはっは」と大きな声でわらつたので、ぼくは、とこむかし、い思ひがしました。

しかし、ぼくはこんな面白い名まえがないと思う。たいていのうちのねこの名まえは、その家にあつた名まえがつけられていると思う。

でも、ぼくのうちのねこは、かわつた名まえだ。「ボチ」は、小さい時、こすりどから、むらつた。いまでは、自分の母親のことをわすれたように、ねむっている。母は、こんな時、いつも

「リこうやね」という。ぼくも、ほんとうに、リこうだと思つた。

朝がならず、ストーブの所ですわっている。

それに、ねずみをよく取つて来るが、食べない。ほんとうにはたらきものなということがわかり、「ボチ」を見なわなくてはいけないうつ。

また、ふろへはいる時や、ねるときむついてくる。ふろへはいるうとすると、水と「ちようだい」と、いつているような目つきで、ふろへはいつてくる。

水をやると、「ペロリ、ペロリ」となめる。こんなとき、母は、「めんじゃへ、いけはいかに」と、いう。

そんな時、いつもきまつたように、ぼくは、「おらのおるところへ来たいがじゃが」と、じまんする。

ぼくがねるときは、ふとんの方へ来て「入れてよ」。

と、いつているような目つきをしている。ふとんをあけてやると、よろこんでいるようだが、なかなかに、はいつてくれないう。こんなやうなとき、うでがだるくて、だるくてわからなくなつたという時に、ちよこんとはいる。こんなときの「ボチ」は、少しきらいになる。

すきを「ボチ」だが、よくないところもある。それは、朝、だれか台所へ行かないと、おきないことと、せいたくなところである。

ふつうのうちのねこなら、パンをやると、よろこんで食べますが、「ボチ」は、ぜんぜん食べない。うまいもののばかり食べさせていたから、こんぱんなどを食べないやうになつたと思う。だからこれから、うまいものをやらないやうにしようと思つた。かわいそうになつてくるので、ついうまいものをやってしまう。

それに、「ボチ」は、ぼくにちよかいを出す。家の人たちは、小さいから、だらにしているが、

といっているが、ぼくにはどうしても、そのように思えない。
ぼくには、もっと、ほかにわけがあるように思われる。

それは、ねこがぼくにちよかいをかけても、ぼくはたたかないからです。家中の人はみんなたたきますが、たたかないのはぼく一人です。

ねこが、ちよかいを出すと、ぼくは「ひよっ」と、手をひっこめる。こんなことをして、たいくつな時遊ばれるので、少し「ボチ」に感しやしているような気持ちになる。

こんなことをするのは、いけないなあと思ひながら、ときどきこんなことをします。

「ボチ」には、少しわるいところもあるが、ぼくは、「ボチ」がだいすきです。

だから、「ボチ」を日本一のいいねこだと思っています。

クリスマスケーキ

三年

沢田 浩勝

ねえちゃん、お使用にいつている間に、お店やからケーキが来ました。

ぼくは、せっかくのケーキがとけたらまずくなるかもしれないと思ひ、すぐに台所へ行ってれいぞうの戸をあけて、すぐに下の方へいれました。

れいぞうの中へ入水ながら、青いケーキかな、それともれいさいケーキかなあと思つている間に、学校からねえちゃんがかえつて来ました。

ぼくは、すぐに

「ねえちゃん、ケーキが来たよ。」

という、ねえちゃんは大きいケーキ、それともれいさいケーキだったと、ぼくにききました。ぼくは、すぐにれいぞうの中へ入水したから、わからないうと、ねえちゃんにいいました。

ねえちゃん、なかとあけてみるかといひました。ぼくは、

「だめだよあけたら、とけてまずくなるかもしれないぞ。」

と、ねえちゃんにいうと、ねえちゃん、

「わけは、せいすぐにとけて、まずくなるわけがないじゃないか。」

と、ねえちゃん、

「ぼくはそれもうたなあと思ひました。」

それから、数時間たつておとうさんとあかさん、

んがしごとから、かえつて来ました。

それから、八時ごろになつて、ぼくはおとうさん、

んが、そろそろ食べようといつて、ぼくに青いところのケーキをくれました。

ケーキをじょうずに、うまく切つて家中みんな、

でケーキを、なかく食べました。

ほんとうにおいしいクリスマスケーキでした。

ポチ

四年 鍋谷 好美

わたしの家に「ポチ」というかわいい犬がいます。学校から帰っていくと、小屋の中からかわいい顔を出して「おかえり」というように「ワンワン」と言います。さんぽに連れていくと、とても喜んでわたしより先にとんでいたり、じゃれついたり、

そうして、さんぽがわると、おかしをやりませんが、ちゃんと「おて」をします。

また、ポチの目は、まんまるくて、さよろりとしています。そうして「はな」が、あよこなんですわっているの、ちよとおかしいけど、かわいい犬です。

ある日、ポチが、かたから落ちて手をわるくしました。さっそく、犬のお医者さんへ連れていって、みてもらいました。お医者さんは「ああ、これはたいていけががやないですよ。くすりをつけておけばすぐよくなりますよ。」といわれたので安心しました。それから、毎日、学校から帰ると、ポチの手をなでてやったり、からだをさすってやったりしました。一週間ぐらいかけて、ようやくなおりました。わたしは、うれしくて、またさんぽに連れていきました。しばらくさんぽしなかつたので、ポチも大よろこびです。けれども前のように、あまり元気があ

りません。「どうしたのかな」と心配になりました。おかあさんに話すと、「大じょうぶ。そのうちになれたら、また元気になるよ。」といわれたので、と安心しました。早く早く元気なポチになるのを、楽しみにまっています。そうしてまたいろいろなことを教えてやりたいと思っています。

弟

四年 長崎 恭子



わたしには、ひとりの弟がいます。とても、いたずら者で、それにとてもしんぼうです。わたしが、へやをそうじていると「ねえちゃん、のへや、きれいなったね。」といひます。だけれど、つぎの日、学校から帰つてみると、わたしのへやは、本が二がひっくりかやっています。わたしのだいなものを、持ち出して、どうして、二いことしたか、て、弟をつかまえて「どうして、二いことしたか、いいがに、なほして、もとどおりにせしやい。」とおこつてやると、弟は自分がわかつたような顔も、ないで、「ベロ」を出して、にやにやします。弟は、ほんとうにいたずら者です。そうして、ちよ

と あまやかすと、すぐちやうしにのります。
ときどき、わたしのわやつまで食べて、知らぬ顔
をしていきます。わたしが「きょうのおやつ、なかつ
た」と聞くと、弟は「なかつたよ」といって、うそを
つきます。でも、あとから「ぼく、ねえちゃんの方
もたべたが、ごめんね」と、すなおにあらまします。
わたしの、そんなとき、弟が大好きです。

また、弟がいないときは、家の中が、シーンとし
て、とても静かですが、弟が帰ってくる、家の中
は、さやうに、にぎやかになります。でも、家の中
がシーンとしているときより、にぎやかの方がたの
しいです。弟が、外でひとりであそんでいるときは、
富山や入道で興ってもらったおもちゃで、ひとりこ
と、言いながらあそんでいます。そんな弟が、とて
かわいいです。

また、弟が、ごはんを食べてから、一時間、もた
ないのに、また「はらへった」といって、さわざた
てでは、うちじゅうの人をわらわせます。夜になる
と、なんでも食べすぎるとは「ねえちゃん、べんじ
に行つてこようよ」といいます。でも、わたしは
「おとこやから、ひとりで行つてこいよ」といって
やると、「うん、そうか、おとこか」といって、ど
しん、どしんと音をたてて、元氣よく行つてきます。
そんなとき、わたしは、男らしいと思います。
夜、テレビを見ていると、かならず、本を挟んで

きて「ねえちゃん、本読んで」といいます。しかた
なしに、テレビを見るのをやめて、読んでやりま
す。と、ちやうど読むと「ぼく、もうやめた」と
いつて、おかあさんのそばへいさめます。そうすると
わたしが「読んでくれない」といって、なんでも、お
わりまできかんがけ。と、しかります。でも、弟は
すまし顔、おかあさんにだかれていきます。いたず
らしたりするけど、やっぱり、わたしは、弟が大好き
です。

ねこ

四年 木村 良 穂

わたしの家のねこは、小さくてとてもかわいいね
こです。そうしてあまりいたずらをしません。いた
ずらをするといつても、つくえの上へあがったりす
るくらいです。わたしが学校から帰つてくると、ど
こにいても、けんかの方へあかえにきてくれます。
ねこにも、友だちがいるようです。
このあいだ、ねかのはいっているなやで知らない
ねこ、と、やれながら、体じゅうねかだらけにしてあそ
んでいました。

わたしがたいくつしている、ねこは、あそんで
ほしいうな顔をして、そばへすりよつてきます。

そうすると、ねずみとり、こみたに、おいか
け、のつたりして、じゃれながらあそびます。そのうち
に、妹もきて、いっしょになつてあそびます。ほんとう
に、家のねこは、かわいいねこです。いつまでもいつま
でも、だいに、して、かわいがつて、やりたいと思つて
います。

新しい家

四年 銅谷 一 善美

もうすぐ、わたしの家は新しい家になります。い
また、ていつ、さういふうです。いままで道から少し
は、いった、ところにあつた、のですが、新しい家は、道
の、ところ、に、たります。家を、たてる、のに、いろいろ、苦勞
を、しなければ、なりません。木材、運び、を、したり、木材
を、わたした、り、しなければ、なりません。でも、新しい家
が、でき、る、んだ、から、少し、ぐら、いは、が、まん、し、な、け、れ
ば、と、お、とう、さん、も、お、か、あ、さん、も、い、わ、れ、ま、す。でも、寒
くて、つ、め、たい、と、さ、な、さ、い、や、に、な、つ、て、ま、す。
この、あい、だ、お、か、あ、さん、が、ひ、ふ、み、の、へ、や、を、作、つ
て、お、う、え、る、の、に、が、まん、し、な、さ、い、と、い、わ、れ、た、と、さ

わたしが「まさか」と思いました。しかし、それは
ほんとうでした。夜になつて、おじいちゃんとおと
うさんが話しておられました。
「子ども、のへやは、大じやうと六じやうにしたほう
が、よ、か、ら、う、と、い、つ、て、お、う、れ、ま、し、た。その、横、で
お、い、ち、や、ん、が、お、う、道、の、方、や、じ、や、と、い、つ、た、の
で、お、う、さん、も、わたしが、ま、え、と、い、い、合、い、を、し、て、い、る、と
お、う、さん、と、お、か、あ、さん、が、ひ、ふ、み、が、前、と、い、わ、れ
ま、し、た。わたしは、お、う、さん、に、い、ち、や、ん、が、う、し、ろ
と、さ、い、と、い、い、ま、し、た。そう、する、と、い、ち、や、ん、が、
「どうして、お、う、さん、が、い、い、の、に、と、ぶ、つ、ぶ、つ
い、ま、し、た。そう、する、と、お、う、さん、が、どうして
も、お、ま、え、は、う、し、ろ、に、ま、ま、つ、と、う、じ、や、と、い、わ
れ、ま、し、た。わたしは、う、れ、し、く、な、つ、て、に、こ、に、こ
な、な、ら、お、か、あ、さん、も、わたしの、へ、や、ど、ん、な、へ、や
なの、と、さ、い、と、さ、あ、お、う、さん、に、さ、い、て、み、な
さい、と、い、わ、れ、ま、し、た。お、う、さん、に、さ、い、と、さ、い、
で、よ、さ、う、し、て、み、と、い、わ、れ、ま、し、た。わたしは、
大じやうの、へ、や、で、つく、え、が、道、の、方、を、向、い、て、い
て、お、う、さん、に、ベ、ッ、ト、を、作、つ、て、お、う、さん、を、
の、ベ、ッ、ト、を、つく、え、の、横、に、お、い、て、に、ん、ご、う、
を、か、ざ、つ、て、電、氣、ス、タ、ン、ド、を、お、い、て、カ、ー、テ、ン
も、さ、れ、い、な、レ、ス、に、し、て、
と、い、ろ、い、ろ、考、え、ま、し、た。なん、だ、か、も、う、わ、た、し、の
へ、や、が、さ、き、た、よ、う、な、氣、が、し、ま、し、た。

すこぶらい ひどくても がまんして いっし
ようけんめいおてつだいしようと思っ
ています。そうして 早く新しい家が
できるのを 楽しみにまっています。

給食週間

四年 水越 正子

二月二日から二月七日まで給食週間です。給食週
間のあいだの二んでは 一年から六年まで 各学
年で 一日ずつ二んではを作り その二んではで給
食が作られるのです。

さようは 六年生の二んではで 牛にゅう
とパン コロッケ やきそば おでん でした。や
はり えいようを考へてあるのだなと思ひました。
四年生の二んではは もちろん えいようを考へ
て作りました。それは 理科の勉強で えいようを
の勉強をしたからです。牛にゅうとパン フリン
やきそば くだもの にきめしました。この二んでは
を考へるときに えいようの六つの表をみなが
ら考へました。なかなか 意見が合わないので 一
時間ぐらいもたつて ようやくさまりました。

おの仕事

五年 前田 秋美

私の母は朝早くから起きて、ごはんのしたくをし
なつたり洗濯をします。それがお母さんの仕事で、
そうして 夕飯の準備をします。お母さんの仕事は
いろいろあります。

お母さんは朝早くから起きて、ごはんのしたくをし
なつたり洗濯をします。それがお母さんの仕事で、
そうして 夕飯の準備をします。お母さんの仕事は
いろいろあります。

お母さんは朝早くから起きて、ごはんのしたくをし
なつたり洗濯をします。それがお母さんの仕事で、
そうして 夕飯の準備をします。お母さんの仕事は
いろいろあります。

お母さんは朝早くから起きて、ごはんのしたくをし
なつたり洗濯をします。それがお母さんの仕事で、
そうして 夕飯の準備をします。お母さんの仕事は
いろいろあります。

お母さんは朝早くから起きて、ごはんのしたくをし
なつたり洗濯をします。それがお母さんの仕事で、
そうして 夕飯の準備をします。お母さんの仕事は
いろいろあります。

お母さんは朝早くから起きて、ごはんのしたくをし
なつたり洗濯をします。それがお母さんの仕事で、
そうして 夕飯の準備をします。お母さんの仕事は
いろいろあります。

お母さんは朝早くから起きて、ごはんのしたくをし
なつたり洗濯をします。それがお母さんの仕事で、
そうして 夕飯の準備をします。お母さんの仕事は
いろいろあります。

一年や二年や三年は まだ えいようのことはわ
からないから 自分たちの好きなものを考へて出し
ているのかなあと思います。

でも 給食週間になると 自分たちで好きな二ん
ではを作ることが出来るのだいへん楽しいです。
このほかに お昼の放送時間に えいようのク
イズがあります。さようのクイズの二つは
「たんぱく質」でした。問題が放送されると 教
室のみんなは わいわいさわさわとびだして
二つをさがすにいました。あしたは どんなクイ
ズ 楽しみます。

給食週間になると おばさんたちは たいへん
と思います。わたしたちの好きな二んではで
よくはつてくださったから うちをうの数が多
くていそがしいと思います。

冬だから 寒くてつめたいから なおひいと思
います。だから わたしは おばさんたちに いっ
つかんしゃしていただきます。

給食のおばさん ほんとに、ありがとうございます。
「えいよう」をみたいだが
「すき」をみたい。せうに よろこんで、なんでも
食べる元気な子。

にならないと思ひます。

親せきの家へ遊びに行つて

五年 前田 直樹

夏休みには門前の親せきの家へ 五日間も遊び
に行つてみた。はじめは三日間うそだつたが、
花火大会があったので、三日間のぼしたのだ。

二日めに高岡の古城公園へ行つて花火をみた。
ぼくは車をかりた、いとこのお兄さんはもう車をか
けてくれた。のどがかわいて水を飲みたくなつたの
で、寺へ行つた。水がみ場にはいしやくがあった。
そこで、ぼくはういしやくを使って水をのんだ。
それから、公園のあちこちを、いろいろ見まわ
して家へ帰つた。

四日めの日はみんな高岡へ遊びに行った。高
岡は大きな町だ。たまたまデパートでは「へビ」
をみた。「コブラ」「ハブ」「マムシ」など、リ
ンなまへびがいた。そして、駅ではいろいろなゲ
ームを遊んだ。

その夜花火大会があった。アパートの二階でみ
てみたが、とてもきれいだった。たまに丸いの
や、せんが何本もでてきたのが、特にきれい
かった。かえりにガマを二本飼つておつて親せ
きの家へ帰つた。

楽しい日々が終わり、こゝろへ帰つてきた。ぼく
たち、大門や高岡で遊んだ五日間は、今
年の夏休みで、一番楽しい思い出になつてゐる。

楽しい日々が終わり、こゝろへ帰つてきた。ぼく
たち、大門や高岡で遊んだ五日間は、今
年の夏休みで、一番楽しい思い出になつてゐる。

楽しい日々が終わり、こゝろへ帰つてきた。ぼく
たち、大門や高岡で遊んだ五日間は、今
年の夏休みで、一番楽しい思い出になつてゐる。

楽しい日々が終わり、こゝろへ帰つてきた。ぼく
たち、大門や高岡で遊んだ五日間は、今
年の夏休みで、一番楽しい思い出になつてゐる。

来斗の詩画

五身 校東 美智子

2. ~~イ~~にオク^イ交^イえするくせき^イ直^イすこと、
イオ^イ少くてもオク^イすに^イてあげることを

「わたしは、おれに
お返しする。」と、
おれは泣きながら、
おれに答へた。

く 如に交交する。ちやみに如に交交するやほよく交
ニとだ。これかうはよく考へてものを言うよ
うにしたいと思う。

交わに於ては、仕事は、はずかしが、うに、自分（自分）思つた
 ことを、とし、とし、答へる、うに、したりと、思つた。
 交わに、をを、うに、とし、答へる、うに、したりと、思つた。
 私の、は、私が、小、学、校、三、年、生、の、時、分、に、は、私を、うに、とし、答へる、うに、したりと、思つた。
は、私に、なつて、死んで、いつた。うに、とし、答へる、うに、したりと、思つた。
私は、うに、とし、答へる、うに、したりと、思つた。うに、とし、答へる、うに、したりと、思つた。
 なる、うに、とし、答へる、うに、したりと、思つた。うに、とし、答へる、うに、したりと、思つた。

「それだ、さういふに、わづかまでやにあまゐたり、時には
 るをせしたりにして、女の仕事をせ伝うどころが、自分
 がくたぐやばりなり仕事まで女にやらせていた、
 今更こそは、自分だけぐやばりてゐる仕事はさうさ
 んのこと、女の仕事までするだけではないであらう
 と思ふ」。

「アアア、それは、この二つを定行して、女を少くても
 出すにしてみればよいのだと思ふ」。

「え、けんと事なになうた。」
と、思つて家へ歸りよした。

おじいちゃん

五
年
前
田
裕
子

私のおしりちゃん、今年六十四です。前は大きな身体でしたが、今はとて小さくあります。この前、自動車に乗って四人ほへ行つた帰りに、家の近くの川へおちふれました。血がいたりがうてくさへ流れてしまふた。

「さう、黒部の石生湯屋へ入浴をすした。しかし、
「帰りをたし、帰りをたし。」
と、りかゆるので、一月ほど前帰つてこられま
した。」

頭を打ったので、時々かいたことをいわれます。いろいろいふことを、まさかといわれたり、みずちやんのことを、いふこといわれたりします。そのほかおかしなことが、ほかにもいくつかあります。歩くと悪いので、便所とリ、かえてります。それなのに、おりにほりながら、重りておられます。また、こたつに入つて、一時間もすると、
「もうぬるゐる」といわれます。私は足がつかれたうたなあと、思つて、ぬかしてあげます。おじいちゃんか

文海集

五斗谷口張子

この前、田舎の大きな森に、
トバイと云ふしよにまゐつた。
高橋生がオ

私はさかがしりつで行つてみると、みんなオ
トバイを引きあげて入る所でした。私はあ
ちからを生きてみて、ゾーンとくしました。それは今
まで、こんな所でまながなかつたからです。
そのうち、組合の人が高校生に何か話をしてくま
うれました。するとバトカーがやってきました。
組合の人は、

と、高橋生に言った。おれは、
「あんたも、ほかの事だが、リカッたんだ」
「へ行つてしまいました。すると、組合の人、
とリカッました。しかし、パートカーはすぐ来のオ
ー

事故の原因は、オートバイに乗つて来た学生が、スピードを出して走つてゐたので、前かゝ来た自転車とぶつかりました。おちたのだそうです。高橋生は太変もうしろケなさそうに、「どうもすみませんでした。」と、言つてオートバイを引いて家へ帰つてりました。

ゆ
う
す
と
ハ
か
ふ
と

いけすき人 百に

と
し
し
く
の
牛
や
ふ
二
と
を

四
三

「たがへてきて、どか、酒を買ってきて。」

とが
し
り
ち
せん
だ
め
なが

「でも、でも、たけ、おじいちゃんのことよく聞いて、だいにうけたらと思ひます。おとうさんも、おかしさんも、私と同じ考え方と思ひます。」

おはあちゃんす。おじりすやんのかんあをくた
たふやせたので。おじりちゃんと同じように、
たふはくあげたいと思います。

おばあちゃん

五斗松田美惠子

私のおぼろぢやんは、弟のこもりをしたり、ご
はんの用意をしたり、四んぼへ行つて仕事をし
たりして、家中で一番おそろしき人です。

おはあち。んはとてほがらで、やさしりん
です。だから、私はおはあちやんが大好きです。
それに、ひとがらも、うったものでも、自分がたで
ずに、みんな私たちにくれます。

れか、ほんとうのキャンプの味かなあーと思った。
次の日の夕方、キャンプファイヤーをした。その回りを囲んで歌などを歌った。最後に火のまわりを、ぐるぐる走りながら、石に願いごとをこめて投げた。暗やみの空に、あかあかと焼え上がるほのおが、とてもきれいだった。
六年間の思い出で、失敗したこと、うれしかったこと、感動したことなど、大人になっても、なつかしい思い出として残ると思う。

キャンプ生活



長島明美

六年の夏休み前に、舟川上流へキャンプに行った。テントを張り終わると、シートの下にしまったもぎのにおいが、ぶーんとたどった。
ごはんをたぐるとき、どうなることだろう、と心配したが、どうにか成功した。
夜になって、みんな寝たらしく、しーんと静かになると、英子君が笑い出すと、寝たふりをしていたみんなが、てんでに笑い出した。
朝になると、どうにか食事をすませて、山へ登った。登っても、登っても、同じ所ばかり通っているような気がした。途中で、ほら穴のような所があり、クローラーのように涼しかった。
先生が、頂上まで行かないと言われたので、がっかりした。帰りに、写真を取る時、政美さんが石からすべったので、助けようとする、私もすべってしまった。
昼食の時、五年生が来た。食べる時には、各グループへ

思い出



長島 正

二年生の時だった。
父に、補助車のついた自転車を買ってもらった。ぼくは、学校から帰ると、すぐに、けいこをした。
「補助がついとるから、だいたいようぶだ。」
と言って、新村の方に遊びに行った。
ある日、父が、補助車を取ってしまった。そして、父に後押しをしてもらって、新村まで、行ったり来たりし、けいこをした。
それから、ひとり毎日けいこをして、転んではかりいたので、ひざが赤くなつたが、続けてがんばったので夏には乗れるようになった。
ふらふらしながらも、はじめて乗れた時は、とてもうれしかった。

六年生の夏休みの時に、舟川の上流へキャンプに行った。

二日目の朝、はじめてごはんをこがした。ぼくたちはかまして食べた。

夜、キャンプファイヤーをした。
枯れ木や、よもぎなどを焼やした。山の、しーんとした中に、ぼくたちの歌声や、あらい声や、山にぶつかって、大きくはねかえって来た。

火が弱くなつたころ、みんなが、自分の希望を言って、石を火の中へ入れた。

十時ごろ、テントでさわいしていると、先生が来られてこわい話をされたが、一度聞いたことがあるので、あ

へ一人ずつ来た。
夜は、みんなでキャンプファイヤーをやった。歌やおどりをやり、最後に、自分のわがいをこめた石を投げ、こう思った。
いつかは、この願いがかなえられるだろう。

東京見物の思い出

中田久仁雄

四年生の夏休みだった。父が東京へ行つてくるか。と言われたので、ぼくは、すっかりうれしくなつて、「はい」と、返事をした。その日、すぐに行くことになった。
東京に着いた時は、朝だった。おじさんの家で朝ごはんを食べると、すぐに東京見物に出かけた。
東京タワーに着いた。あまり高いのでびつくりした。中に入つて、ぼう遠望で見た。
それから、かすみかせきビルを見て、モノレールに乗つて、羽田空港へ行つた。そして、いろいろな飛行機を見て、おじさんの家へ帰つた。
つぎの日、上野の公園で、さいごうたかまりの銅像を見てから、動物園へ行つた。
いろいろな動物が、たくさんいたので、珍しかった。



まりこわくなかった。

三日目の昼にテントをたたんで帰つた。
家に着いた時は、もう、ふらふらで、すぐ寝た。

キャンプ

吉田芳美

六年の一学期の終りに、舟見の奥の、大谷馬止めという所へキャンプに行った。

トラックから、まきや、荷物をおろし、テントと組み立てにかかったが、思うようにうまく出来なかった。

ごはんをたぐと、こげつかしたり、ほかの組では、水を入れないうでいたものもあった。でも、自分たちで作つたせいかな、とてもおいしかった。

島後の夜、PTAの人たちや、五年生の代表が来て、キャンプファイヤーをした。

わたしの父も来ていたし、五年の時に習ったことを先生も来ておられた。火を囲んで歌をうたつたり、しりとりをしたりした。

先生は、PTAの人たちと、へびを焼いて食べた。おられた。わたしの父も食べた。よく食べられるもんだなあ。――。おいしいのだろうか、と思った。

やがて、PTAの人たちも帰られ、小さくなつた。火に火をつけて、自分の願いをこめた石を投げた。私は火に向ける。

「勉強がうまくなるように。」
と、祈つた。そして、この願いが、かならずかなえられたいのになあーと、思った。

自転車

扇原和子

四年生の夏休みのことであつた。自転車の練習をしよ
うと思つた。

友だちの郁代さんが、すーい、すーいと乗っている
のがうらやましくて、私も、乗れたらなあ、と思いなが
ら、自転車を持ち出した。すると、おじさんが来て、

「乗れらるか。」

と言われたので、はずかしかったが、小さな声で、
「乗れんが。」

と言つた。

「そいがなら、うしろを持ってやるから乗ってみい。」
と言われた。

そうして、おじさんに助けられながら、ようやく乗っ
ていると、

「バンドルをよろよろするな。」

ときびしい声で、びしりと言われた。まるで、自転車
の家庭教師に、しかられているみたいだ。おじさんに、
「もう一度。」

と言つた。

「どれだけやっても同じだ。」

としかられた。仕方なしに、一人で、カチマン、カチマ
ン、シューとやっている、しまいに足がいたくなつて
来た。

三日めには、すこし足をかけることが出来るようにな
つた。

四日めの朝、思い切つてすわってみると、うまく行つ



たので、広い道まで乗って行つた。その道には、自転車
や自動車は通つていた。
ふいに、ハンドルがいやりの方へ曲つて行つたので、
「ガチマン」とひっくり返つてしまった。
「いたい。」
と、思わずさげんだ。けれども、初めて自転車に乗れた
ことが、ほんとうにうれしくて、それほど、いたみは感
じなかった。

三つの思い出

池原英子



三年生のよもぎかりの日の事であつた。

一、二年生は先生と、三年以上は、部落によもぎ刈り
をした。ぼくたちは、六年生をリーダーにして、大家庄
小学校の方へ行つた。

みんな、汗でべとべとになつて刈つた。大分たくさん
刈つたし、うす暗くなつたので、帰途についた。よもぎ
をいっぱい積んだので、リヤカーが重かつたし、つかれ
ていたの、さっぱり進まなかつた。それに、道がわか
らなくなつたりした。

家についたのは、午後八時ごろだつた。

先生方も心配して、さかしておられた。その時、二度
と、こんな無茶なことをして、心配をかけてはいけな
い、と思つた。

六年生の夏休みに、舟見の六谷馬場でギャンプをし
た。

ごはんの準備などは、はじめてだったので、さっぱり

うまくいかなかったが、とても面白かつた。

特に印象に残つたのは、ギャンプファイヤーだつた。
みんな、かわるかわる歌をうたつた。その時、PTA
の人たちや、先生方が、ダンスをおどられたので、みん
太笑いをした。
とても楽しいギャンプだつた。



二学期の終わりに、マリン大会があつた。

ぼくたちは、三、六キロメートルのコースを走つた。
ぼくは、一考君と、校門のところまでセリ合つた。結局、
ぼくが二位で、一考君は三位だつた。一位は謙君だ。
これは、毎年一位か、二位だが、ぼく自身は、下位とい
七位と十位ぐらいだつたので、よくがんばつたをあり
と、とてもうれしかつた。



謙君のプレゼント

舟本行博

一年生の時のことだつた。

ぼくは、父母といつしよに、長島にある前田大工さん
の所へ、トラックに材木をのせて出かけた。

五分ほどして、前田さんに「つく」と、父が

「外へ出とれ。」

と言つたので、家の前につつ立っていると、西の方から

「わあわあ。」

という声かして来た。見ると、同級生の謙君が中ぐら
いの高さの自転車で乗って、やって来た。そのうしろか
ら、二、三人の子どもが追っている。謙君はつかまり、
自転車の一部がこわれたらしい。

それから、自転車を引っぱつていったかと思うと、す
ぐに道へとび出し、何かを手に持つて、まっしぐらに、
ぼくの方へやって来た。そして、
「これ、やるぢや。」
と言つて、ぼくに渡した。また、かけがへつて行つた。
それは、見るからにおい、そう、くりだつた。ぼく
は、家に帰るまで、いつと、そのくりを見つめていた。
そして、母といつしよに、庭に植えた。
それから、三年たつて、くりはすくすくと育ち、花が
咲いた。今では、毎年大きな実がついている。そして、
くりの实がなると、一年の時の、くりをくれた時の謙君
の姿を思い出す。
ぼくは、いつか、かならずプレゼントしようと思つて
いる。

乗しかつたギャンプ

長島弘子

六年生の夏休みに、待ちに待つていたギャンプがあつ
た。舟川までは遠いので、前田さんの家のマイクロボス
に乗つていった。

川岸にテントをはり、ごはん作りに取りかかつた。お
かずの方は、うまくいったけれど、ごはんは、ほんごう
に水を入れなかつたので、こげついてしまった。私は、
やはり、新米はだめだなあ、と、つくづく思った。

二日目に、山へ登つたり、石や草を集めたりした。わ
たしは、

「先生、これ何ていう石。」

と言つて、石や草の名前を聞いた。それで、い勉強に

なつたと思う。家へ持って行くのに、きれいな岩石やめずらしい植物を拾って来た。

二日目の夜には、PTAの役員の人や父兄の人たちも来られて、楽しいキャンプファイヤーをした。あかあかと燃える火を囲んで、みんなが肩をくみ、歌をうたったり、しり取りをした。

橋場先生や、上原先生は、お酒をのんで、まつかな顔をして、陽気な声で歌っておられた。

火が消えそうになると、みんなで、石に、かなえことを言っただけに投げた。わたしは、
「学校の成績が上がりまうように。」と祈った。

やがて、火が消えると、テントにはいり、ゆっくり眠った。

わたしは、あの楽しかったキャンプのことを、永久に忘れられないであろう。

キャンプ



松田純子

六年生の夏休み、舟川の六谷止めへキャンプに行った。

目的地に着くと、トラックから荷物をあらし、テントをばった。緑の山々に囲まれた清らかな谷川。実に、ロマンチックだと思った。

夜、毛布をかぶって、しゃべっていると、橋場先生が怪談を話して下さった。私は、こわい話がきらいなので聞かないようにしていたが、面白かったので、いっしょに夢中になってしまった。

それが終わってから、谷先生が、トラックをやりに来られた。はげめきをやってから、ろうそくを消して、謙君の見た夢の話聞いた。

そのうち、正君が寝たので、みんなも寝ることになった。二日目の昼に、チャーハンを作った。謙君が、こしうと塩を入れすぎたので、塩からくなった。だけど、みんなで力を合わせて作ったので、おいしかった。他の組では、米をこぎながら、水を入い、かきためて、こけついで食べられなくなつたのもあった。

夕方、PTAの役員の人と、上原先生が来られた。夜になると、キャンプファイヤーをした。みんなが歌って、それから、二人ずつで歌った。わたしは、裕子さんと歌った。そのうちに、裕子さんのお父さんと、上原先生が、ダンスをされたので、みんな大笑いをした。

それから、石に、ねがいごとを言っただけに投げこんだ。
「勉強がよくなりますように。」とねがった。

ほんとうに、面白く、楽しいキャンプだったと思う。

キャンプの思い出 杉田一彦

六年生の夏休み、舟川に行つた。場所は、舟川の上流だった。

キャンプ地まで、前田組のマイクロバスで行った。荷物は、農協のトラックに積んだ。

向うに着くと、すぐに、テントを張った。川原なので、たかただった。そこで、よもぎを刈って、下にひいた。

それから、自転車を引っぱっていったかと思うと、すぐに道へとび出し、何かを手に持って、まっしぐらに、ぼくの方へやって来た。そして、
「これ、やるや。」

と言っただけに、ぼくに渡した。また、かけ去って行った。

それは、見るからにいい。そうなる。くりだった。ぼくは、家に帰るまで、いっと、そのくりを見つめていた。

そして、母といっしょに、庭に植えた。

それから、三年たつて、くりはすくすくと育ち、花が咲いた。今では、毎年大きな実がついている。そして、くりの实がなると、一年の時の、くりをくれた時の謙君の姿を思い出す。

ぼくは、いっか、かならずプレゼントしようと思つて



謙君のプレゼント

舟本行博

一年生の時のことだつた。

ぼくは、父母といっしょに、長島にある前田大工さんの所へ、トラックに材木をのせて出かけた。

五分ほどして、前田さんにつくと、父が「お出でなれ。」

と言つたので、家の前につつ立っていると、西の方から「わあわあ。」

という声がしてきた。見ると、同級生の、謙君が中くらいの高さの自転車で来って、やって来た。そのうしろから、二、三人の子どもが追っている。謙君はつかまり、自転車の一部がこわれたらしい。

六年生の夏休み、待ちに待っていたキャンプがあつた。舟川までは遠いので、前田さんの家のマイクロバスに乗っていった。

川岸にテントをはり、ごはん作りに取りかかった。おかずの方は、うまくいったけれど、ごはんは、はんごうに水を入れなかつたので、こげついてしまった。私は、やはり、新米はだめだなあーと、つくづく思った。

二日目に、山へ登つたり、石や草を集めたりした。わたしは、

「先生、これ何ていう石。」
と言つて、石や草の名前を聞いた。それで、い勉強に

なつたと思う。家へ帰って行くのに、きれいな岩石やめずらしい植物を拾って来た。

二日目の夜には、PTAの役員の人や父兄の人たちも来られて、楽しいキャンプファイヤーをした。あかあかと焼える火を囲んで、みんなが肩をくみ、歌をうたったり、しり取りをした。

橋場先生や、上原先生は、お酒をのんで、まつかな顔をして、陽気な声で歌っておられた。

火が消えそうになると、みんな、石に、かなえごとを言つて火に投げた。わたしは、

「学校の成績が上がりまうように。」と祈った。

やがて、火が消えると、テントにはいり、ゆっくり眠った。

わたしは、あの楽しかったキャンプのことを、永久に忘れられないであらう。

キャンプ



松田純子

六年生の夏休み、舟川の六谷馬止めへキャンプに行った。

目的地に着くと、トラックから荷物をおろし、テントをばった。緑の山々に囲まれた清らかな谷川。実に、ロマンチックだと思った。

夜、毛布をかぶって、しゃべっていると、橋場先生が怪談を話して下さった。私は、こわい話がきらいなので聞かないようにしていたが、面白かったので、いつしか夢中になってしまった。

それが終つてから、谷先生が、トラップをやりに来られた。ばねめきをやってから、もうそくを消して、謙君の見た夢の話を聞いた。

そのうち、正君が寝たので、みんなも寝ることにした。二日目の昼に、チャーハンを作った。謙君が、こしうと塩を入れたので、塩からくなった。けれど、みんなで力を合わせて作ったので、おいしかった。他の組では、米をこぎながら、水を入、かき混ぜて、こけていて食べられなくなつたものもあった。

夕方、PTAの役員の人と、上原先生が来られた。夜になると、キャンプファイヤーをした。みんなが歌

つて、それから、二人ずつで歌った。わたしは、裕子さんと歌った。そのうちに、裕子さんのお父さんと、上原先生が、ダンスをされたので、みんな大笑いした。

それから、石に、ねがいごとを言つて、火に投げこんだ。

「勉強がよくなりますように。」とねがった。

ほんとうに、面白く、楽しいキャンプだったと思う。

キャンプの思い出

杉田一彦

六年生の夏休み、舟川に行つた。場所は、舟川の上流だった。

キャンプ地まで、前田組のマイククロスで行った。荷物は、農協のトラックに積んだ。

向うに着くと、すぐに、テントを張った。川原のうでがたかただった。そこで、よもぎを刈つて、下にひいた。

テントができたと思つたら、もう謙君が入つていた。すぐに出てきて、

「よもぎくらい。」

と言つた。ぼくも、入つてみると、プーンとよもぎのにおいかった。でも、すぐになれついた。

夕方、いよいよ、ごはん作りをした。謙君は、何か探しているようだった。

「石に探したら。」



「歌立表わすれてきた。」

と言つた。でもぼくたちは、大体の事を思い出して、適当に作った。ぼくたちのごはんは、よくたけていたが、こげつきになつたグルーブもあった。

夜、寝る時、先生が怪談を話して下さった。

次の日の夜、キャンプファイヤーをやった。みんな火を囲んで、にぎやかに、歌を歌つた。PTAの人たちは、まつかな顔をして、大きな声で歌をうたっていた。

最後に石を投げて火を消しながら、かなえごとをわつた。

勉強部屋

飛田功二

ぼくの勉強部屋は、ざしきのすぐ横にあり、四じょうあります。この部屋は、ぼくが使うまでは、天上の板も張つてなければ、前の戸はがらすだけで、すき間から風が入ってくるので、とても寒かったのです。

一年前、ぼくの部屋になるまでは、たたみも引いてなかつたので、ごみだらけで、掃除するのに何日もかかり、

他の部屋に移りたい気持ちもしたくらいです。

冬に帰って、母が、

「こたつで勉強したら。」

と言われたが、何となく、勉強にといこもつてした。

やがて、小学校を卒業して、中学校、高等学校に入る

と、今の何倍も勉強しなければならぬ。したかつて、

今までよりずっと多くの時間を、この部屋で過ごすことになる。だから、何となく住みついたこの部屋に、感謝しなければならぬと思います。

思い出

池原政美



三年生の春のことだった。

おねえさんに、

「自転車に乗られるようになれ。」

と、勧められた。

そのころ家には、大きな自転車しかなかったもので、それだけでいそした。自転車のサドルにすわってみると、

ペダルに足が届かなかつた。

ひまな時は、お姉さんが、自転車のうしろを持って練習させてくれた。一日に、二、三べんも自転車をひく

り返したりして、ひざにけがをして泣き出しそうになつた事もある。

こうして、毎日、毎日練習した。

ある日、ひとりで庭に出て練習していると、何となく

すーつと集めるようになった。サコしハンドルが左右に

ふらついたが、初めて集めるようになったのである。

とても、うれしかった。

六年生の夏休みのことだった。舟川の上流へギャンプに行つた。

二日目の朝、五年生の男子四、五人が来た。昼からは父兄の方がすいかなどを持ってこられた。夜食がすんでから、ギャンプファイヤーをやった。

山のしーんとした静けさの中で、みんなと火をかこんで、歌をうたったり、しりとり遊びをしたりして楽しんだ。

火が消えそうになったとき、私たちは、ねかいごとを言つて、火の中へ石を投げた。あのとときの楽しさは、いつまでも、忘れられないだろう。

ギャンプ



新村信久

六年生の夏休みのこと、マイクロバスに乗って出かけた。うおうおと曲つた道を通つて山深く進んで行くと、やつとギャンプ地に着いた。

翌日の朝、起きるとすぐに食事の用意をする。はんごうに米をいれ、水を入れようとした。ところが、水の量がわからぬ。飛田君に聞くと、

「米の一、四倍やろか。」

と言つた。その通りに水を入れてたぎにかかつた。だが時間がたつたが、なかなかにふき上からぬ。先生がいまして、ふたを取られると、ぷーんと、こげくさいにおいかした。急いで火から下して、さかしまにした。

その時は、心からくやくして、くやくして、下その組はいかにできているのに……、もつと先生

の話を聞いていればよかった。と思つた。しかし、今でも、あまり聞いていない方だ。

その日の午前中に山へ登つた。どんどん登つて行くと、工事をしてる所があつた。危いので橋をかけてもらつた。細々とした谷で、両側は一面に樹が茂っている所を通つて行つた。すみ切つた水をおおっているいろを緑のかいぶつのようなしげみがかぶさつてきそうだった。

先生が、

「もうりばまで頂上まで行くのはむりだ。」と言われたので、引き返すことにした。

帰りに、川の上に突き出した大岩の上に集つて写真を撮つた。

また、もとの工事場に出た。ぼくは、あわてて渡つた。そして、板のはしに足を引っかけた。ころんでしまった。仕事をしている人が、

「だから危いぞ。」と言つたろう。

としかられてしまった。山の美しさもよかつたが、しかし、それよりもころんだ時のはずかしさの方が印象に残っている。自分のおちよこちよいかわかつた。

ギャンプは、このようにみんなと遊んだり生着したりしたので、六年間でいちばん楽しかった。

かい談

吉田郁代

六年生のギャンプの時のことである。

先生が、夜ねる時に、こわい話をして下さつた。ねこ又という話しか、いちばんこわかつた。すーつと音

もなくねこが入つて来て、ちくちくとこがつたつめで、おていする人の首を、さくつーと切るところが、いちばんこわかつた。

ちようどその時、虫が鳴いていたので、その夜は、なかなか眠れなかつた。先生が、

「この話は、ほんとうの話です。」と、言われたのでびつくりしました。

この事件の起つたところを、ねこ又、と言うのだぞ。つた。現在でも、ねこが化けるのか。と思つた。

思い出の六年間

杉田春彦

ぼくは、入学したばかりの一年ぼくの時である。講堂で、先生のしょうかいがあつた。

二年生の担任、上田よしえ先生。

と、教頭先生がおつちやつた。見ると、体のかつちりと、わさうな女の先生だった。

それから、しばらくしてみると思ったよりやさしい先生だった。しかし、おこると、びしびし言われる人だった。ぼくは、わすれ物が多い。と言つておこられたものだ。先生が、よその学校へかわつて行かれる時、もう忘れものをしないぞーと決心した。

四年の時に上原先生がいらっしゃつた。この人も、体のかつちりとした人だった。でも、面白いことを言つて笑わせることがあつた。

五年の時のことだった。先生が、ぼくたちといっしょ

にピンポンをされた。ほかに、そのようなことがあつて、三学期になつて、勉強がおくれてしまった。それを取り戻すのに、いっしょうけんめいやつていっているうちに、学校をかわつていきました。

だから、六年になつたらかんばろうと思つた。

六年の時だった。

道徳で、たい焼きの勉強をした。その時先生が、

「大きくなったら、何になりたい。」

と言われた。その時、決めていなかったもので、でたらめを言つた。

ある日のことだった。ニュースで、ごろぼくが多いと聞いたので、かぎをしめて寝るようになった。でも、お客の時はどうしようかと、考えた結果、ブザーをつけることにした。

やつて来た電気屋さんには、手頃よくさつとやつてしまった。

ぼくは、大きくなったら電気屋になろう。と思つた。それ以来、ぼくは、いつも電気屋のことはかり頭に思っている。

ギャンプの教訓



前田耕治

六年のときのことだった。

夏休みのはじめに、ギャンプをした。農協のトラックに荷物を乗せて、みんなは、前田組のマイクロバスで行つた。ぼくと、ほかの三人は、橋場先生の車に乗つて行つた。

ぼくは、しばしばピアノの方へ行つて立つていた。今
考へてみると、
「おつかない先生だったな。」
と、頭の中に印象が残っている。



六年生のキャンプのことである。
いちばん印象に残っているのは、キャンプファイヤー
である。大きなたき火とかこんで、みんなで歌をうたつ
た。さいごに石を投げて火を消した。
みんなで山へ登った。きれいな川、すき通った水、美
しいようなある岩、もりこぼれるような緑の山々、ほ
んとうに素晴らしい風景が、ありあうと、心に残ってい
る。

困ったこともある。ごはんが、こけついた事である。
ぼくたちの組は、それほどこでもなかったが、よへやる組
は、どうしてあんなに、こかすのだらうと、不思議に
思ふほどだった。
今からみれば、ほんとうに、楽しい思い出である。

四年生の思い出 国枝安夫

四年生のときだった。
謙君たちが自転車に乗っているのを見ると、とても楽
しそうだった。ぼくも、何とか乗れるようにならう
と思つて、母の自転車を持ち出して、宮へ行つた。
どこにか乗ったところまではよいが、ハンドルがくね
くねとしてとりにくくて、まともにぶつかつたり、
コンクリートにぶつかつたりで、顔や頭がきずだらけに

なつてしまった。その上、服まで泥だらけ、頭にきて、
自転車を買ったこともあった。
あの時のくやしきは、いまでも忘れない。しかし、自
転車に乗れたら、どこへ行くのにも、走っていくより楽
だから、やっぱり乗ってみたいな、と思つた。
小っちゃい自転車なら乗れるだろう、と思つて、父に、
「自転車買って。」
とせめて、やつと買つてもらつたが、乗ってみると
やつぱり、ハンドルがぐらぐらした。
そのうち、思い切つて乗ってみると、乗れた。
すーい、すーいといけるようになった。
とてもうれしい気持ちだった。

キャンプの思い出 尾田美穂子

六年生の時のことだった。
私たちと先生で、舟川の太谷止めへ、キャンプをし
に行つた。馬止めまでは遠いので、前田さんの家のマイ
クロバスに乗せてもらい、荷物は、農協のトラックに積
んでもらったので、たいへん便利だった。
馬止めにつくと、天候が悪いので、すぐ荷物を運び、
テントを作つた。さいわい、雨が降らなかつたので、安
心した。テントができ上がると、荷物をテントの中にい
れ、ゆつくり休んだ。
たいぶたつてから、先生が、
「夕飯の用意。」
とまわれをみて、すぐに、取りかかつた。始めのうちは
こつぱり、うそく、でもさうたが、二日目の昼飯

のけいび会社を作るのだ。

杉田春彦

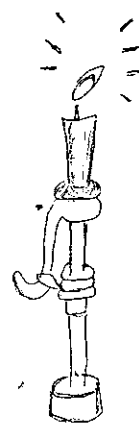
ぼくは、将来、電氣屋になりたい。ラジオを分解した
り、組み立てたりするのが好きだから、やがて大きくな
つたら、テレビやラジオを修理したり、販売したりする
仕事がいちばんよいと思う。

舟本行博

からでんだんうまくなつた。
その日の夜、キャンプファイヤーをした。夜なので、
みんなこわそうにしていた。すこしたつと、まきに火が
つき、私たちは、輪になった。各グループにわかれて歌
をうたつた。先生方は、酒をのんで、まっかな顔をしな
から歌をうたわれた。
あとから、PTAの役員の人たちが来られたので、い
つそう楽しくなつて来た。
だんだん火が小さくなるころ、みんな石を持って、自
分のかねえたいことをわかつて、火の中に投げ入れた。
それから、みんな、テントの中へ帰り、ゆつくりとね
た。

あの時の楽しかったこと、今もはつきりと心に残って
いる。いつまでも忘れられたいことであらう。

ぼくの夢、わたしの夢

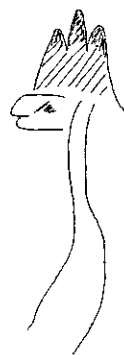


こんな人になりたい。

池原英子

ぼくは、カードマンになりたい。日本では、最近犯罪
が非常にふえてきた。だから、カードドッグといつしよ
になつて、大きな会社のけいびをするのだ。
そうして、お金をたくさんもらって、世界でも指折り

ぼくは、やがては職業をきめなければならぬ。
夢が大きいかも知れないが、弁護士になりたい。その
ためには、まず勉強をすることだ。つぎに、からだをき
たえることだ。それだけのことなら、いつしうけんめ
いにかんばれば、できると思う。



杉田一彦

長島 謙

ぼくは、将来、小・中学校の先生になりたい。そして世の中に役立つ子といっぱい育てたい。

中田久仁雄

ぼくは、名だんていになりたい。そして、日本の犯罪をなくし、平和で、たのしい世の中を作りたい。

島尻英之

ぼくは、将来探検家になりたい。まだ、知られていない島や土地を探検し、珍しい動物や、石などを集め、博物館を建て、いろいろなものをかざりたい。

長島 正

ぼくは、パイロットになりたい。そして、ロケットに乗って、遠くの世界新記録を作りたい。

それに、好きな国へ行って、好きなことをしたり、外国人と話をしたい。

ぼくは、小さいころから、空に、あこがれていた。鳥のように、自由にとべたらいいなあーと、思っている。



ぼくは、将来いっしょにいたい。いろいろな動物の勉強して、その病気を直してやる。そして、世界で、かけめぐるのだ。

新村信久

前田裕子

デザイナー。これが、私の夢であり、希望である。小さな小さな店でもいいから、自分の店を持ちたい。

長島久子

私は、大きくなったら針子になりたい。デザイナーの人が考えたデザインを自分でぬい上げてみたい。

日本甲の子どもや、おとなに、いようぶで、美しい服をぬって上げるのだ。

西島素子

わたしは、先生になりたい。そして外国へ行く。いろいろな勉強をし、日本の教育とどこがちがうかを、よく調べ、日本へ帰って、日本の学校をもつと、もつと

前田耕治

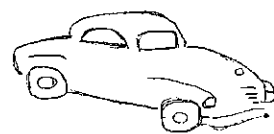
ぼくは、大きくなったら、万能選手になりたい。どんなスポーツで一流のうでになり、オリンピックに出て、世界一のスポーツマンになるのだ。

ぼくは、いつも、すばらしいスポーツマンの夢ばかり見ている。かならず万能選手になって見せるぞーと。

国枝安夫

ぼくは、アメリカへ行きたい。アメリカにリッパな家をたて、住みついて、いろいろな仕事をしたい。

長田信一



ぼくは、タフシーの運転手になりたい。いろんな人へに乗ってもらい、日本甲まわってみたい。

飛田功二

ぼくは、将来、建築家になり、大きな会社を作って、いろいろな建物を作りたい。

さいごに、世界一大きな建物を作って、大金持になりたいと思う。

尾田美穂子

わさの屋、美容師になること。わたしは、美容師になること。まず、身なりを美しくすること。それが大切です。

それで、わたしは、たくさんのかみや、顔を美しくして、みんなに喜ばれる、いっぱい美容師になりたい。と思っています。

池原政美

わたしは、大きくなったら、保育さんになりたい。それは、赤ちゃんや、小さな子どもをかわいさからでず。そして、子どもたちに親しまれる、やさしい保育さんになりたい。

扇原和子

わたしは、大きくなったら、世界甲をまわって、デザイナーの勉強をしてみたいと思う。なれるか、なれないかわからないけれども、自分では、夢をもって、がんばりたいと思っています。

吉田郁代

わたしは、洋裁学校を出て、洋裁店につとめ、みんな

に喜ばれる服を作ってみた。

長島明美

わたしは、将来、ひみつ探偵になりたい。それには、たいへんな努力がいるし、才能もなければならぬと思ふが、いつしうけんめいに勉強して、ぜひ、なりたいものである。

長島弘子

わたしの夢は、先生になることです。もしなれたら、子どもたちに、勉強をくわしく、親切に教えてあげ、みんなに親しまれる先生になりたい。

吉田芳美

わたしは、看護婦になって、足の不自由な子どもたちや、小児まひの子どもたちの看護をして、直してあげたいと思う。山奥のそまつな病院でもいいから、看護婦になりたいと思う。

松田純子

わたしは、保育さんになりたい。それは、小さな子どもが好きだからです。もしなれたら、なま虫の子をなくさめ、明るく健康な子どもたちにしたいものです。

雪

吉田芳美

ビュービュー
雪がふってくる。

火の玉のようないきおいでふぶいてくる。

鬼の軍たいが、おこつてきたように、窓に、うなりを立ててぶつかると、窓が、ビュービューと泣いている。

野につもつた雪も、時々舞い上がる。もう一度、空にもどりたいようにみえる。

つくし

池原政美

つくしのぼうやが、土の中から目をさました。

道ばたの雑草に、

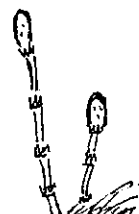
「春は、まだ。」ときいた。

雑草は、ぶっさばうに、

「まだだ。」という。

つくしのぼうやは、

悲しそうな顔をした。



わすれ物

長田信一

時間がない。

だれも通らない道を、

ぼくは走る。

教室にはいつて、黒板を見る。

「あーわすれた。」

ぼくはいそいで取りに行く。

にし

前田耕治

雨が降つたあと、

からりと晴れて、

大空にじがかかる。

七色のにじが、羊道を描く。

幼いころ、

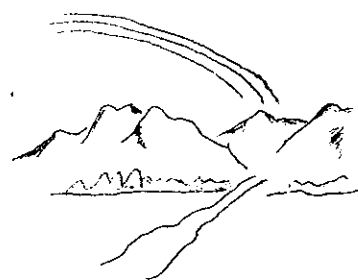
にじの近くまで、

行つて見たかった。

いまでも、その気持はかわらない。

いっかきつと、

にじの近くまで行つてみたい。



池原爽子

新聞

四・五枚の新聞紙、
一枚一枚の紙の中に、
字がいっぱいつまっている。

小学校

尾田美穂子

この六年間勉強した小学校。

私をはけましてくれた小学校。

もうすぐ中学生。

しかし、おとなになつても、

この桐山小学校を、

わすれることができない。

これから、

ますます発展していくように、

春

前田裕子

やなぎが芽を出し、

ふきのとうが生えはじめ、

やわらかい風が吹きはじめた。

チューリップや、ヒヤシンスも芽を出した。

教室の水仙は、もう花をひらいた。

もういそ卒業。

もういそ中学生。

小学校でいごの春、記念すべき春。

ベタ・ベタ・ベタ、
テントが揺れる。
山の木立に風が鳴る。
朝の涼しい風。
「みんな、起きろー。」
「朝めしのしたくだ。」
「いっしょうけんめいにたいたごはん。」
目になみだを浮かべ、
どうにかできたみそ汁。
「おいしい。おいしい。」
上出来だったカレーライス。
大しっぱいのソーメン。
なつかしい、思い出のキャンブ。

つくえ

長島

謙



いたずらしたつくえ。
ふきんで、洗ってやったつくえ。
ぼくと、いつもにらみ合ってるつくえ。
もう、そんなことはできない。
六年間、ぼくに協力してくれたつくえ。
何の返しもできない。
かんにんしてくれ。

夜の静けさの中に、
音もなく降る雨。
もう、空に帰れないと、
涙を流している。
空のかなたから、
あとから、あとからと降る雨
さびしい夜。

米つき

西島素子

ガーザーと米つきの音がして、
白くけしようにした米が、
たきのように流れでる。
つきたての米にさわると、
すべすべしている。
上のタンクでは、
黒んぼのけん米がすいこまれて、
そのあとが、火口のようにだ。

友だち

島尻英之

ぼくの友だち、
わるい友だち、親切な友だち。
なかのよい友だち。
いつまでも、いつまでも、
どの友だちも、大事にしたい。

ブルトーザー

国枝安夫

ブルトーザーは、雪のとき活動する。
ぎっしりもった雪を、
力強く動かす。
かぐガツ、かぐガツ。
うなりを上げてつき進む。
重いからだをカいっばいやすぶって、
山のような雪を押ししていく。
何というばりきだろう。
百ばりきかな。

かれ葉

長島明美

かれ葉を見つめていると、
鳥のように見えてくる。
たくさんの鳥が、
飛んでいるようだ。

かれ葉は、どうして落ちるのだろう。
ほんとうは、落ちないように
みんなで肩を組んでいる。
でも、やがて風の小ざうがやってきて、
一枚ずつ落としていく。

雪

杉田香彦

雪は、わねのように、
音をたてずにふってくる。
だれがふらすのだろう。
新しい雪をふむと、
サクク、サクク
こま粉をふむようだ。
夕日がかましく反射して、
もえるように光ると、
チカ、チカ、チカ、
いち面に空石をちらしたようだ。



コロ

新村信久

コロはかわいいねこだった。
今はもういない。
生きているときは、
れいかおをしてかわいかった。
それに、あいきようもあった。
自分の手で、まごをあけて、
のっそりと入ってくる。
カラ、カラ
だれかと思つてびつくりする。

戸のすきまからのぞく。あの丸いかお。
今はいないココ。

フルトーザー

ガッガッガッガッ
土を動かすフルトーザーは、
戦車のように、鉄ぼうは持たないが、
すごい力を持っている。
大きな石の山、
小山のような土を
かるかるど動かす。

こけ

庭に生えたこけ。
日光があたると、
ほかほかとあたたかそうになる。
ふかふかの毛布のように、
寝ころんでみたくなる。
こけは、米のとぎしるを、
土にまくと生まれるという。
米の中に、どうしてこけのたねが
あるのだろうか。
ふしぎなこけ。
美しいこけ。

中田久仁雄

長島ス子

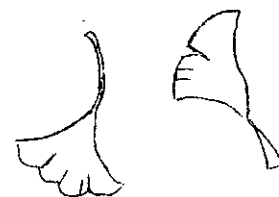
おち葉

赤、黄、みどりのおち葉が、
ひらり、いらりとおちる。
おち葉をはいっている。
わたしの肩に、
つきから、つぎとおちてくる。
はいてもはいてもきりがない。
ほうきのきをとめて、
上をみると、
風にゆられて、
おちるようにおちてくる。

ろう下

くつ下やスリッパですべったろう下。
ダダダダー、スーシュー
走る音、すべる音。
楽しかったなあ。
でも、今はいけうたんかしいてある。
歩くと、いけうたんかすべる。
柱と柱につかまって、
いけうたんをすべらせる。
弟は、およぐまねをする。
「こらっ。」
お父さんの声。
弟は、おつという間に
いけうなつた。

松田純子



吉田郁代